

第3章 カレン世界

第2節 言語・文学・歌謡（35枚）

1. マナプローでの体験

1991年3月、修士課程の大学院生だった私は当時カレン民族同盟の総司令部のあったマナプローを訪れた。ミャンマー側のスゴー・カレン語とタイ側のスゴー・カレン語の違いを調べるため、タイ西北部の町メーサリアンで調査をしている最中のことだった。ミャンマー側出身のスゴー・カレン人で、わけあってタイ側に住んでいたプータームーさんというおじいさんから、毎日、私はカレン州パアンのスゴー・カレン語を学んでいた。このおじいさんが「カレン語を研究したいのなら、カレンとビルマの戦いのことを知っておかなければならない」と言って、私をマナプローに連れて行ってくれたのだ。

トラックの荷台に乗って、まだ夜が明けきらぬうちにメーサリアンを出発し、昼過ぎにトラックはタイ・ミャンマー国境の小さな集落メーサームレープに到着した。ここからボートでサルウィン川を下り、マナプローに向かうのである。メーサームレープには多くのカレン人がいた。中には商売をやっている人もいる。プータームーさんはカレン語を使って彼らと話をしている。ところがプータームーさんは、相手によってはカレン語をビルマ語に切り替える。私は一度プータームーさんに「あの人はビルマ人なのか」と聞いた。プータームーさんは私のこの問いにかぶりを振って「カレン人だ」と短く答えた。

熱帯林に覆われた山岳地帯をボートは南下してゆく。ボートの乗客はカレン人やビルマ人である。私達を含め、二十人くらいはいるだろうか。途中、川は二股に分かれる。右への流れはサルウィン川の本流であり、この流れはカレン州のパアンを通過してさらにモン州のモールメイン（モーラマイン）の南でインド洋にそそぎ込む。私達の乗ったボートはここで左に進路を取る。この川は、このあたりでは珍しく、南から北へと流れるタウンイン川だ。タウンインというのはビルマ語の呼び名で、タイ語ではムーイ川と呼ぶ。ほとんどの乗客は途中で降り、私とプータームーさんだけが残って、最終目的地のマナプローに到着した。

マナプロー（mānāpló）というのはスゴー・カレン語で、「勝利の地」を意味する。mānāは「勝つ」という意味の動詞、plóは「平原」という意味の名詞である。この二つの語が複合して一つの名詞になっている。マナプローは熱帯の緑多い山々に囲まれた風光明媚な所だったが、美しく穏やかな自然の景観とはうらはらに、緊迫した空気が漂っていた。その空気は否が応でも目に入ってくる兵士や武器によってかもしだされている。夜間には爆弾の炸裂する音が遠くから聞こえてきた。実をいうとプータームーさんの息子達はこのマナプローで兵士として戦っていた。

プータームーさんはこの基地に暮らすカレンの人たちと話すとき、多くの場合はスゴー・カレン語を用いていた。ところが、ときにそのスゴー・カレン語がビルマ語に切り替わった。相手によっては終始一貫してビルマ語を用いている。実は、私はこのとき初めて、ポー・カレンの人にスゴー・カレン語が通じないことがあることを知ったのである。メーサームレーブでプータームーさんがビルマ語を用いて話しかけていたカレン人も、ポー・カレン人だったのだ。

「スゴー・カレン人にポー・カレン語は分からないが、ポー・カレン人にはスゴー・カレン語が分かるし、話すこともできる」私はこのように理解していた。実際このように言うカレン人は多かつたし、ポー・カレン語のほうがスゴー・カレン語よりも音韻体系が複雑なので、ポー・カレン人がスゴー・カレン語を学ぶほうが、その逆よりも容易である。だとすれば当然のことながらマナプローではスゴー・カレン語がカレン人同士の意志疎通に使われているのだろうと私は思いこんでいた。ところが実態は違ったのだ。現実には、スゴー・カレン語ができないポー・カレン人は多い。ビルマ軍を相手に共に戦っている人たちが、互いにカレンの言葉ではなくいわば「敵」の言葉であるビルマ語を話さなければ意志疎通ができないことを知り、私は愕然としたのである。なお、マナプローはこの4年後の1995年に陥落した。

2. 複数の「カレン語」

「カレン語」には意志疎通のできない複数の言語がある。その具体的差異を見る前に、この言語の系統について少し触れておく必要があるだろう。

カレン語を研究していると言うと、カレン語とビルマ語がどのくらい違うのか、方言のようなものなのではないのか、というような質問を受けることがある。これに対する答えは簡単だ。まごう方なきまったく別の言語である。そもそもビルマ語はSOV型の言語であるが、カレン語はSVO型であり、語順からしてまったく異なる。カレン語とビルマ語を比べてみよう。ここではカレン語の中から東部ポー・カレン語の例を取る。「手でご飯を食べなさい」は、東部ポー・カレン語とビルマ語で以下ようになる。

[東部ポー]	án	mì	dē	cú	
	食べる	ご飯	で	手	「手でご飯を食べなさい」
[ビルマ語]	le?	nê	thəmín	sá	
	手	で	ご飯	食べる	「手でご飯を食べなさい」

語順も、個々の単語も、まったく異なることが分かるだろう。カレン系諸言語の語彙を周辺諸言語と比較してみると、ビルマ語を始めとするチベット・ビル

マ系の諸言語との共通性が見られる。ところが、チベット・ビルマ系諸言語は一部の例外を除いてほとんどが SOV 型の言語であるため、カレン系諸言語の系統は謎だとされていた。しかし現在では、カレン系諸言語はあくまでもチベット・ビルマ系であり、SVO 型のモン・クメール系あるいはタイ系の何らかの言語との接触によって語順を変えたのだという説が有力になっている。私も、カレン系諸言語は明らかにチベット・ビルマ系だと思う。ただ、これをもって単純にカレン語がビルマ語に「近い」のだとは考えないでもらいたい。数百種類を数えるチベット・ビルマ系諸言語は同一の祖語から分岐した言語群と考えられるとは言え、個々の言語は何千年という長い時の流れの中でそれぞれ独自の体系を持つに至ったのである。

さて、ビルマに住むカレン人の間では、狭義の「カレン語」に三つの言語があるということが共通の認識になっていると言ってよい。その三つとは、スゴー・カレン語、東部ポー・カレン語、西部ポー・カレン語である。スゴー・カレン語の地域差はポー・カレン語に比べればそれほど小さくなく、全体として意志疎通に大きな問題は生じない。いっぽう、ポー・カレン語は意志疎通に支障を生じるほど地域差が大きい。ビルマ国内では、カレン州やモン州の周辺で話される東部の方言と、エーヤーワディー川のデルタ周辺で話される西部の方言の二つに大きく分けることができる。これをここでは東部ポー・カレン語および西部ポー・カレン語と呼ぶ。この二つは互に通じない。下にスゴー・カレン語（パアン方言）と東西ポー・カレン語の同じ意味を表す文を挙げる。

- [スゴー] mǎhákəʔ jə māló pyākəjɔ klòʔ
 昨日 私 学ぶ カレン 言葉 「昨日私はカレン語を学んだ」
- [東部ポー] mu̯á jə mǎlú phlòUN chəkhlaɪN
 昨日 私 学ぶ カレン 言葉 「昨日私はカレン語を学んだ」
- [西部ポー] mu̯à jə mǎlò phlóUN shəkhlaɪN
 昨日 私 学ぶ カレン 言葉 「昨日私はカレン語を学んだ」

スゴー・カレン語が東部ポー・カレン語とも西部ポー・カレン語ともかなり異なっているのは一目瞭然だろう。当然この例のみでは例証できないけれども、スゴー・カレン語とポー・カレン語には別の言語と言い切ってよい程度の違いが認められる。一方、東部ポー・カレン語と西部ポー・カレン語は、通じないとは言え、同一言語の方言と見なしてよいくらいには似ている。東部ポー・カレン語と西部ポー・カレン語が通じない最大の理由は、声調の高低が逆になっていることが多いということである。上の例では、母音の上に記したアクセント記号のようなものが声調を表している。声調というのは、ごくおおざっぱに

言うと、単語の意味を区別するために用いられるピッチの違いである。上の表記では、mà のように書いた場合は低く平らに、má のように書いた場合は高く平らに発音されることを表している。東部ポー・カレン語と西部ポー・カレン語ではこれが逆になっていることがこの例から見てとれるであろう。もちろん、声調の違い以外にも、子音・母音の違いや語彙の違いも意志疎通の妨げになっている。語彙の違いとしては、東部ポー・カレン語で「良い」は tèinnèin と言うが、西部ポー・カレン語では mǎŋâ と言うといった例が挙げられる。ちなみに、「カレン人」はスゴー・カレン語で「プアカニョー」(p̄ākəŋó) 東部ポー・カレン語では「プロン」(phlòun) 西部ポー・カレン語では「プロン」(phlóun) という。東西のポー・カレン語の形は、日本語で表すと同じ「プロン」になってしまうが、声調や母音の発音が異なる。これら三つの呼称はすべてカレン祖語の「人間」を意味する同じ形式にさかのぼることができる。

このように、狭義の「カレン語」とされるスゴー・カレン語、東部ポー・カレン語、西部ポー・カレン語の三つは、意志疎通のできない言語同士なのだ。方言と見なすことも可能な東西のポー・カレン語同士であっても、双方の話者がそれぞれ自分の方言で話したなら、会話は数分と続かない。スゴー・カレン語とポー・カレン語の間ではなおさらである。結局、異なる「カレン語」の話者が意志疎通をはかるには、カレン語以外に頼るしかないということになる。ミャンマーに住むカレン人の場合、ビルマ語が多少なりとも理解できる場合が多い。年輩のカレン人にはカレン語しかできない人もいるが、若い世代にはバイリンガルが多い。いきおい、異なるカレン語の話者同士が話すときに選ばれるのはビルマ語ということになる。私がマナプロで体験したことの背景にはこのような事実があったのだ。

3. 互いに似ている「カレン語」

人間は一般的に、言葉の類似や差異から仲間意識を感じたりよそ者意識を感じたりするものである。狭義の「カレン語」にはスゴー・カレン語、東部ポー・カレン語、西部ポー・カレン語の三つがあり、これらは互いに通じない。では、異なるカレン語を話すカレン人同士は言語を基盤とした仲間意識を感じることはないのだろうか。

この問題提起にまつわることとして、カレン語とカレン民族との関係について次のような議論がなされることがある。「カレン民族が共有する言語は存在しない。このことは、カレン民族という概念が人為的に作り上げられたことの証左になり得る」と。カレン語が一つではないことは既に見たとおりである。だとすれば、このような言説はある程度正当性を有しているように思える。ところが、実際にはそう簡単には言い切れない事実がある。以下ではこの問題につ

いて考えてみたい。

従来からカレン系諸言語には多くの種類の言語が存在することが分かっていた。たとえば Grierson の編による *Linguistic Survey of India* (1928 年)には、方言も別言語として数えると、18 種類のカレン系言語の語彙が掲載されている。最近では、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の新谷忠彦教授の精力的な調査によって、これまで報告されていなかったカレン系少数部族の言語がいくつも発見され、カレン系には 40 種類以上の言語が存在するのではないかとも言われるようになった。これらの多くは、カレン州北部からカヤー州およびシャン州南部にかけての地域で話されている。

図 1 に新谷教授が示した最新かつ最も信頼に足るカレン系諸言語の系統樹を掲げる(Shintani 2003 から転載)。この系統樹は、主に語彙の一致率に基づき、音韻変化のタイプなども加味して描かれたものである。

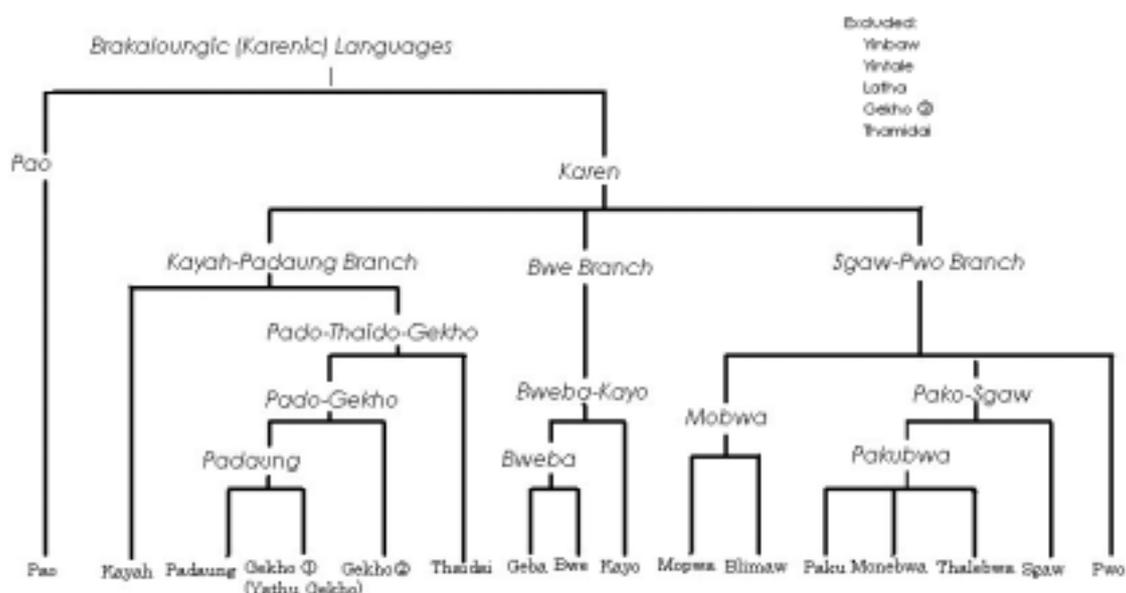


図 1 : カレン系諸言語の系譜関係

新谷教授は同じ論文の中で、16 種類のカレン系諸言語のすべての組み合わせに関して、基礎語彙 183 項目中の語彙の一致項目数、すなわち同源と見なせる語彙の数を示している。

スゴー・カレン語と他の言語の一致項目数で見ると、示された 16 言語のうち、スゴー・カレン語と最も一致する項目の多いのがモーネーボワ語で 155 項目、次いでタレーボワ語とパクー語が 154 項目、その次に多いのがポー・カレン語で、138 項目である。これに次ぐのはモーボワ語の 123 項目と、プリモー語の 122 項目である。最も一致する項目の少ないのがパオ語で、87 項目であ

る。

逆にポー・カレン語の側から見てみると、16 言語のうち最も一致項目数の多いのがスゴー・カレン語とタレーボワ語で、138 項目である。次いでモーネーボワ語が 136 項目、パクー語が 131 項目と続く。最も一致項目数の少ないのはやはりパオ語で、84 項目である。

スゴー・カレン語との高い一致率を示すタレーボワ語、モーネーボワ語、パクー語は、もともとスゴー・カレン語に非常に近い言語としてカレン人の間では知られており、民族的にもスゴー・カレンの一派とされることが多い。スゴー・カレン語に非常に近いこれら三言語を除けば、スゴー・カレン語の側から見て最も高い語彙の一致率を示すのはポー・カレン語であり、逆にポー・カレン語の側から見て最も高い語彙の一致率を示すのはやはりスゴー・カレン語なのである。すなわち、カレン系諸言語のうち、スゴー・カレン語から見たポー・カレン語それからポー・カレン語から見たスゴー・カレン語は、語彙の一致率に基づけば最も近い関係にある言語であると言ってよい。新谷教授が系統樹の中でスゴー・カレン語(Sgaw)とポー・カレン語(Pwo)を同じ Sgaw-Pwo Branch の中に置いているのは妥当なことだと思われる。

スゴー・カレン語とポー・カレン語は、語彙だけでなく文法的にも非常に似た特徴を示す。例えば「私のご飯を食べるのが速い」を、スゴー・カレン語(パアン方言)、東部ポー・カレン語、西部ポー・カレン語、ゲーバー語(Geba; カレン州北部で話される言語)でどのように言うかを私の資料から見てみよう。

[スゴー]	jə ʔō mē khlé				
	私 食べる ご飯 速い				「私のご飯を食べるのが速い」
[東部ポー]	jə ʔáN mù phlé				
	私 食べる ご飯 速い				「私のご飯を食べるのが速い」
[西部ポー]	jə ʔáN mé phlài				
	私 食べる ご飯 速い				「私のご飯を食べるのが速い」
[ゲーバー]	jə ʔā plá dí				
	私 食べる 速い ご飯				「私のご飯を食べるのが速い」

スゴー・カレン語とポー・カレン語では「私 - 食べる - ご飯 - 速い」と語順が一致しているのに対して、新谷教授が Bwe Branch に分類しているゲーバー語では、「私 - 食べる - 速い - ご飯」となっている。これは一例に過ぎない。スゴー・カレン語とポー・カレン語は、他の文法的特徴を見ても、非常に似ていることが多いのである。

このような事実を見ると、カレン系諸言語全体を見渡したときに、スゴー・

カレン語とポー・カレン語は極めて近い関係にあると言わざるを得ない。ときとして、カレン民族という概念が人為的であるということを示すための議論の中で、数多いカレン系諸言語のうちのスゴーとポーの二言語があたかもアトランダムに選ばれてひとまとめにされていると言わんばかりの言説を見かける。ところが実際には、ミャンマーにおいて数多いカレン系諸言語の中のスゴー・カレン語とポー・カレン語がまとめて「カレン語」(ビルマ語で *kăyìn zǎgá*) と呼ばれているのは、言語学的に見れば妥当性のあることなのだ。

スゴー・カレン語と東西ポー・カレン語の三つは、確かに意志疎通が不可能なほどに異なっている。だから意志疎通のためにはビルマ語に頼らざるを得ない。しかし一方でこれらの言語は非常に近い系譜関係にあるのだ。私が思うに、このような言語的な近しさは、日常生活の中でも実感できることだ。例えばスゴー・カレン語の話者同士が一匹の犬を目の前にして話をしているときに *thwí* という単語を発したなら、ポー・カレン語の話者には、その単語が犬を意味することが即座に分かるであろう。「犬」は東部ポー・カレン語で *thwí*、西部ポー・カレン語で *thwì* であり、単語の形が非常によく似ているからである。スゴー・カレン語が理解できないポー・カレン語の話者であっても、スゴー・カレン人同士が会話する場面に接すれば、これに似たようなことは幾度となく経験するに違いない。似た単語は名詞だけでなく動詞や助詞にも多い。たとえ相手の言葉が完全には理解できなかったとしても、このような経験が多ければ多いほど、仲間意識のようなものは増強されていくのではないだろうか。結論として、スゴー・カレン語の話者と東西ポー・カレン語の話者は、言語がある程度共通しているという意識を、強くはないながらも持つことができるのである。

このことは、カレン人とパオ人の関係に比べてみると、より良く理解することができる。カレン州やモン州には決して少なくない数のパオ人が住んでいる。ちなみに、カレン州に住み、ミャンマー中の信仰を集めていたターマニャ僧正もパオ人である。カレン州やモン州においてパオ人の居住地域はスゴー・カレンやポー・カレンの居住地域に近接しており、加えてパオ人の言語がカレン系であることを考えれば、パオ人がカレン人としてのアイデンティティーを持ったとしても不思議ではない。しかし、そのような事例は稀で、パオ人はカレンとは別個のアイデンティティーを持っていることが多い。私は、このような状況を支えるひとつの要素として、狭義のカレン語とパオ語の言語的な遠さが関わっているのではないかと考えている。先に見たように、パオ語は、スゴー・カレン語から見ても、ポー・カレン語から見ても、語彙の一致率が低い。そのぶん仲間意識を増強する機会は減っていくと考えられるのである。

4. カレン語の文字

ところで、カレン人は自分達の言語を書き表すのにどのような文字を使っているのだろうか。

カレン語を書き表す文字には様々なものがある。その中で普及度が高いのは、キリスト教スゴー・カレン文字、キリスト教ポー・カレン文字、仏教ポー・カレン文字の3種類である。まずこの3種類の文字を紹介する。なお、これらの文字の呼び名は筆者が便宜的に用いているものであり、定着した術語ではないことに注意していただきたい。

私がキリスト教スゴー・カレン文字と呼んでいる文字は、1830年代のはじめにアメリカ人バプティスト派宣教師のウェイド(Wade)によって考案されたものである。ビルマ文字を基礎に用いてはいるけれども、母音や声調の表記法に非常に斬新な工夫が見られる。この文字は、カレン州やモン州周辺のスゴー・カレン語の発音をほぼ過不足なく表記することができ、ウェイドの卓越した音声学的素養をうかがい知ることができる。同じくアメリカのバプティスト派宣教師のメイソン(Mason)はこの文字を用いて1850年代にスゴー・カレン語の聖書を出版した。この文字は、カレン語を書き表す文字の中で最も普及しており、部分的ではあるが、仏教徒スゴー・カレンにもこの文字を使用している人達がいる。しかしその一方で、同じキリスト教徒でもバプティスト派以外の信者の中には、この文字をあくまでもバプティスト派の文字だと見なして、使用を嫌う人々がいる。たとえばチェンマイの周辺では、カトリック信者のスゴー・カレン達はこの文字を使わずにローマ字を用いた表記法を用いている。

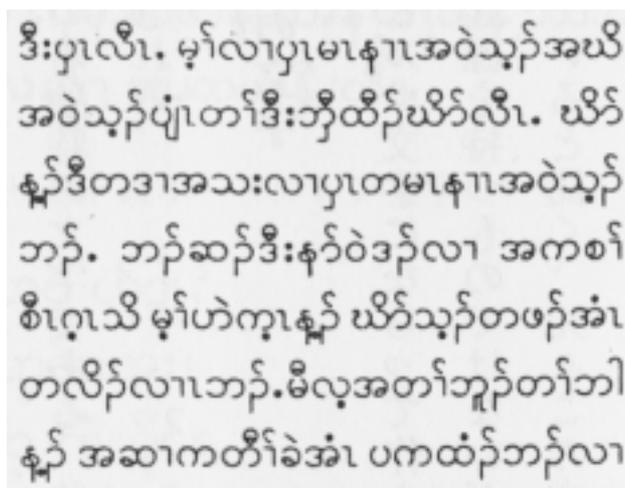


図2：キリスト教スゴー・カレン文字



図3：キリスト教スゴー・カレン文字で「舟は全部止まれ」と書いてある。マナブローを訪れた際にタイ・ミャンマー国境のカレン側検問所で撮影したもの。



図4：ヤンゴンのインセイにあるカレン・バプティスト神学校の看板。最上段にキリスト教スゴー・カレン文字で校名が書いてある。

次に、私がキリスト教ポー・カレン文字と呼んでいる文字は、やはりウェイドがキリスト教スゴー・カレン文字に基づいて1840年代頃に考案したものである。この文字は当初、子音字にラテン文字を使っているなどの点でキリスト教

スゴー・カレン文字よりもさらに斬新だった。しかし、おそらくは現地の人々に受け入れられやすくするために、後にアメリカのバプティスト派宣教師ブレイトン(Brayton)がビルマ文字に近い形に改めた。ポー・カレン語の聖書は彼によって1880年代に完成した。この文字は元々、東部ポー・カレン語の発音に基づいて考案されたものである。ところがカレン州やモン州の周辺には仏教徒のポー・カレン人が多く、あまり広まらなかった。後に、カレンの民族主義の高まりとともにデルタ地帯すなわち西部ポー・カレン語が話されている地域でキリスト教に入信するポー・カレン人が増えたのに伴い、デルタ地帯で多く使われるようになっていく。そのため現在では西部ポー・カレン語の文字と呼ばれることも多いが、東部ポー・カレン語の地域においては少数派であるキリスト教徒は、この文字を現在でも用いている。

聖書は東部ポー・カレン語で書かれているが、それがそのままデルタ地帯で使われている。このようなことが可能になった理由は、この文字が極めて体系的にできていたということと、東部ポー・カレン語と西部ポー・カレン語の音韻対応が極めて規則的であることの二つである。このため、同じ文字記号を東部ポー・カレン語の発音から西部ポー・カレン語に読み替えることにより、西部ポー・カレン語の文字としての使用が可能になった。デルタ地帯では現在ポー・カレン人口の3分の1ほどがキリスト教徒、残りが仏教徒だと言われている。キリスト教徒はこの文字を使っているが、仏教徒のほとんどは宗教的に抵抗があるためかこの文字を使っていない。西部ポー・カレン語にはこの文字に代わる文字もないため、実は、デルタ地帯のポー・カレン仏教徒は自分達の言葉を表す文字を持っていない。

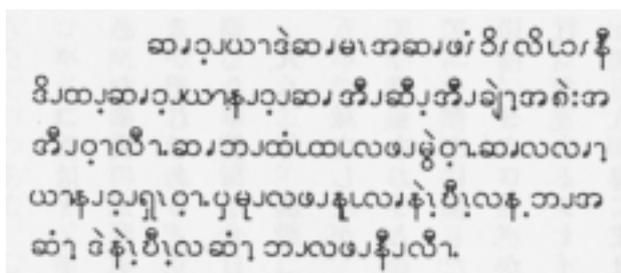


図5：キリスト教ポー・カレン文字



図6：ヤンゴンのポー・カレンのバプティスト教会で見かけた看板。最上段に教会名がキリスト教ポー・カレン文字で書いてある。

三つめに私が仏教ポー・カレン文字と呼んでいる文字について述べる。この文字はモン文字に基づいて作られたものであり、その起源は多分に自然発生的である。カレン州のパアンはモン人(Mon)の古都タトンに近く、この周辺に住むポー・カレンの人々はモン人から仏教を受容し、その過程でモン文字を用いてポー・カレン語を表記する方法を編み出していった。パアン周辺にはこの文字で書かれた貝葉が大量に存在する。貝葉の内容は仏教に関係するものが多い。現在見つかっている貝葉のうち最も古いものは、1851年に書かれたとされる、モン語から翻訳された仏教説話である。伝説によればこの文字は11世紀頃には既に存在していたと言われる。しかし、発音と表記の対応から見るとおそらく18世紀末から19世紀前半にかけての時期に発生したと見てよいと思う。この文字は東部ポー・カレン語では単に「ポー・カレン文字」と呼ばれている。普及度の高い三つのカレン文字の中でこの文字は、カレン人自身が編み出したという点で特筆すべきである。

ဂေမ္မာ ပုံအေအင်းဇးသာဝူဆး အိုသာအေအာ
 ကို ပုံဇးကေမိဒိ အင်းဆူဝေဒူးလ်။ ဇေကျ်သိုဝ်ဆေဝ်. ဆ်
 လိုပညာသီးယိုဝ် နိုဝ်ဆ်ဆိုင် သို့မ္မာအိုဟေဝ် ဝူဆ်အိုသို
 မ္မာအိုဟေဝ် ပုံအေဇးသာ ကိုဆိုင် ပုံဇးကေမိဒိ အင်းယူ မာ
 ယောဟ်မာဆိုင် ကေဝ်. ဝေဒူးလ်။ ဝူမိဒ် အိုဒူးအိုဝေကျ် အာ
 ဒူးအိုဝေသို့အေး ပုံအေဇးသာ ဝူဆးအာကျ် ဇးဂျ်ဂ်လင် လို
 ဆိုင်ဖိုင်ကျ်ဟ် ပုံကေမိဒိ အင်းဆူဆေဝ်. တာ. အိုဝေဒူး ပုံ
 ကဲထင်း ဝူဆးအာဆေဝ်. လို။

图7：仏教ポー・カレン文字



图8：仏教ポー・カレン文字の貝葉



図 9 : 仏教ポー・カレン文字の発展を促進するための式典で撮影。「第 3 回ポー・カレン文字発展祭」と書いてある。

以上 3 種類が普及度の高い文字である。これ以外に重要なものとして、仏教スゴー・カレン文字とレーケー文字にも触れておきたい。

仏教スゴー・カレン文字は、比較的最近になってカレン州の仏教徒スゴー・カレン人の中で使われるようになった文字である。キリスト教スゴー・カレン文字はごく小規模ではあるが仏教徒の間でも使われている。しかしキリスト教の布教のために作られたという経緯があるために、この文字の使用を嫌うスゴー・カレン仏教徒もいる。このような状況の中で、仏教徒のためのスゴー・カレン文字を作ろうという動きが芽生えて考案されたのが仏教スゴー・カレン文字である。

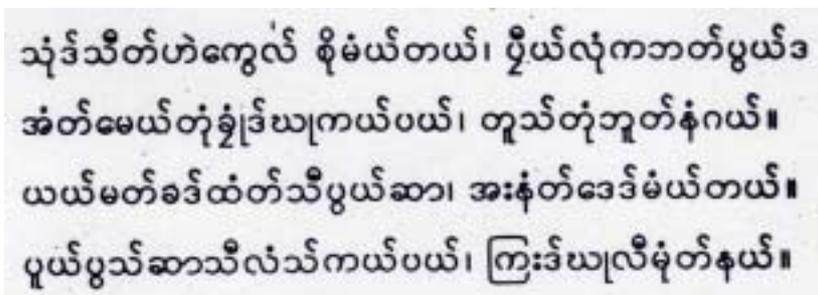


図 1 0 : 仏教スゴー・カレン文字

次にレーケー文字は、ポー・カレン語東部方言を書くための文字である。カレン州のパアン郊外に本山があるレーケー教(Leke)という、弥勒菩薩を信仰する宗教の信者のみが用いている。カレン人には、カレン語を書くための「鶏の足跡文字」という文字が大昔に存在していたという伝説がある。レーケー文字はおそらくこの伝説に基づいて19世紀の中頃に考案されたものであり、独特な形態をしている。なお、カレン語の文字にはレーケー文字以外にもこの伝説に基づく文字が何種類が存在するが、いずれもおそらく最近になって考案されたものである。

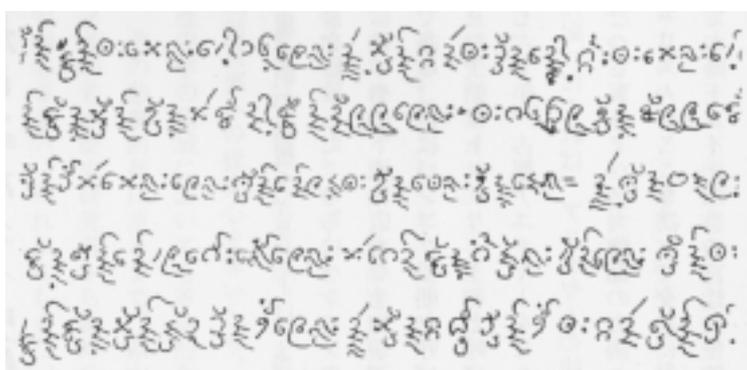


図11：レーケー文字

以上のように、カレン語の文字は宗教にその源を発するものが多い。そして個々人の信仰する宗教によって文字が使い分けられている。この状況が最も鮮明に見られるのが東部ポー・カレン語の地域である。彼らは、仏教徒であれば仏教ポー・カレン文字を、キリスト教徒であればキリスト教ポー・カレン文字を、レーケー教徒であればレーケー文字を用いている。文字が文字使用者の宗教的アイデンティティを表す例として興味深い。

ところで、カレン語の刊行物の中で最も多いのが、キリスト教スゴー・カレン文字を使ってスゴー・カレン語で書かれたものである。キリスト教関係の書物の他、長編小説、歴史書など様々なジャンルのものが出版されている。1840年代には、バプティスト宣教師会によって、タボイ(ダウエー)で月刊の新聞 shātùyō (英語名は Morning Star) が発行されていた。これはミャンマーで発行されたビルマ語を含む現地語の新聞の中ではおそらく最初のものである。現在では、ヤンゴンで pəhīpəxó (「我らが家族」の意) という月刊誌が発行されており、エッセイや短編小説などが掲載されている。

最近では、仏教ポー・カレン文字による東部ポー・カレン語の出版活動も盛んになりつつあり、仏教の教えを説いた本や、散発的ではあるがエッセイや詩な

どを掲載した雑誌も何種類か出版されている。また、タイ側では、出稼ぎなどでタイ側に出国したポー・カレンの有志によって、不定期ではあるが、chìθàbáncúkhî（「若き民族の力」の意）という雑誌が発行されており、エッセイや詩、短編小説などが掲載されている。

子供用の教科書は、スゴー・カレン語（キリスト教スゴー・カレン文字）、東部ポー・カレン語（仏教ポー・カレン文字）、西部ポー・カレン語（キリスト教ポー・カレン文字）のそれぞれで書かれたものが各々何冊かずつ出版されている。これら教科書には民話などの口承文芸やことわざや詩などがそれぞれの言語で収録されている。

また、ヤンゴン大学のカレン人学生協会が発行している雑誌には、それぞれの言語で書かれたエッセイなどが掲載されている。

なお、歌謡については「民俗・芸能」の節を参照していただきたい。

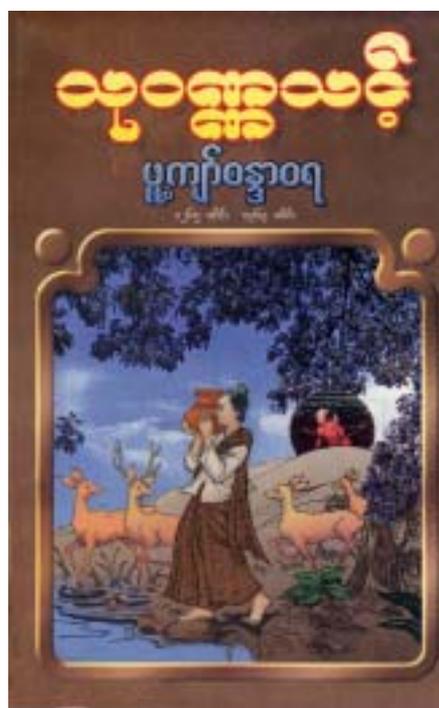


図 1 2 : 東部ポー・カレン語（仏教ポー・カレン文字）で書かれたジャータカ（第 540 番のサーマ本生話）

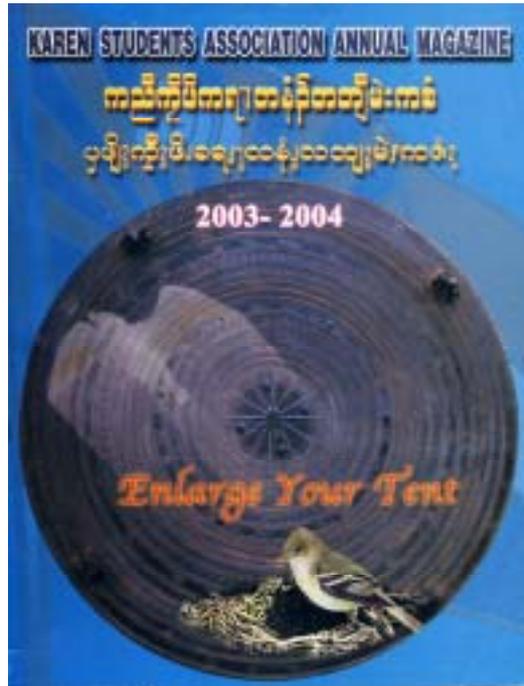


図 1 3 : ヤンゴン大学カレン人学生協会の雑誌。表紙にカレン人のシンボルのひとつ銅鼓があしらってある。

引用文献

Grierson, George A. (1928) *Linguistic Suvey of India* (vol.1, part II).
Reprinted in 1990,1994 by Low Price Publications, Delhi.

Shintani, Tadahiko L. A. (2003) "Classification of Brakaloungic (Karenic) languages in relation to their tonal evolution." Shigeki KAJI (ed.) *Proceedings of the Symposium Cross-linguistic Studies of Tonal Phenomena: Historical Development, Phonetics of Tone, and Descriptive Studies*, pp.37-54. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

(大阪外国語大学 加藤昌彦)